九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Cross-Sectional Study of Age-Related Changes in Oral Function in Healthy Japanese Individuals

伊與田, 清美

https://hdl.handle.net/2324/4496015

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：This is an open access article distributed under the Creative Commons Attribution License which permits unrestricted use, distribution, and reproduction in any medium, provided the original work is properly cited

（様式６－２）

氏　　名	伊與田　清美
論　文　名	A Cross-Sectional Study of Age-Related Changes in Oral Function in Healthy Japanese Individuals （健常日本人における加齢に伴う口腔機能変化についての横断研究）
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　鮎川　保則 副　査　　九州大学　　教授　　重村　憲徳 副　査　　九州大学　　教授　　和田　尚久

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

近年、身体的フレイルに先立ち口腔機能の低下が見られることが報告されており、早期の歯科治療介入によってフレイルが予防できることが示唆されている。そのことを踏まえ、本研究では、健常日本人の口腔機能に関する加齢の影響を調べていた。具体的には、20 本以上の残存歯数を有する全自立の者を対象に、一歯科医院に訪問した 40～89 歳の患者 175 人を研究群とし、20～29 歳の健康な大学生 92 名を対照群として、口腔機能精密検査（舌苔付着度、口腔粘膜湿潤度、咬合力、舌口唇運動機能、舌圧、咀嚼機能、嚥下機能）を実施し、統計学的に比較していた。その結果、対照群と比較して、80 歳以上群では舌苔付着度の増加、70～79 歳群では咬合力の低下が見られていた。また、60 歳以降の群では舌機能低下、70 歳以降の群では舌圧の低下が認められていた。これらの結果より、20 本以上の残存歯数を有する全自立の健常者は、年齢にかかわらず多くの口腔機能を維持できることが示唆されていた。一方で舌運動機能および舌圧は加齢とともに低下していたため、舌の機能訓練が口腔機能維持のターゲットとして有効である可能性が示唆されていた。この結果は歯科臨床、特に高齢者の健康維持プログラムの構築に大きく寄与すると思われ、公聴会において質疑に対する適切な回答も得られたことから、本研究を博士（歯学）の学位授与に値するものと判断した。